

## 釜石市立小・中学校における

### 学校規模の適正化・適正配置基本方針(案)地域説明会 結果概要

日 時 令和6年2月19日(月)18時30分～19時10分

場 所 松倉地区コミュニティ消防センター

参加者数 10人

事務局 教育長ほか8人

#### 【質疑応答】

○Aさん 今の説明では、先生たちのメリットについては言われていたと思うが、子どもたちに対してのメリット・デメリットについて、教育委員会としてどのように考えているのか。

釜石市の人口が減少しているということになれば、当然、子どもの数も減ってくる。この図表を見る限りでは11年までの数だが、これ以降は多分もっともっと少なくなってくるだろうと考えられる。まず子どもたちが勉強し、スポーツをし、様々なことをやっている環境を整えなければ、そこを考えなければならぬのかなと思う。教育委員会として、子どもたちが学校に行きたいと思うように、どのように子どもたちのことを考えているか、子どもたちに対してのメリットについてどう思っているのか、お答えできる範囲でお答えしていただきたい。

小中一貫教育について、大槌町でやっているが、それについての情報があれば、メリットや、やはり別々のほうがいいよねといったデメリットについてもお聞かせ願いたい。

○学校教育課長 まず1点目の学校規模の適正化・適正配置を行うことによって、児童生徒にどのような環境が必要かという部分について、お話をさせていただく。現在も子どもたちに、強く生き抜く力を蓄える教育を柱に学校教育を行っているところである。基本的・基礎的な知識・技能を活用しながら、課題を解決するための思考力・判断力・表現力等を育むことで、集団の中で切磋琢磨しながらこの能力を育み、社会性を身に付ける教育を進めている。

児童生徒にとって望ましい教育環境として、1つは、教員と児童生徒または児童生徒同士のコミュニケーションを図る機会の確保、効果的な集団学習の展開、集団的活動や行事で教育効果が高まるような機会、環境が必要と捉えている。小規模になると、どうしても子どもたち同士でのコミュニケーションが不足になりがちな部分が考えられ、その環境を適正に考えていく必要があると捉えている。

2点目に、小中一貫教育のメリットとして捉えていることについて、お話をさせていただく。小学校、中学校が一緒に活動を行うことによる集団規模の確保がメリットとして挙げられる。また、小学校で目指している目標と中学校で目指す目標が一致することで、よく

中学校1年生になった時に、中1ギャップとしてお話があるが、その抵抗がなくスムーズに小学校から中学校に移行できるという環境を整えることができると捉えている。そのほかにも、異年齢間の交流による精神的な発達やより多くの教職員が児童生徒に関わる体制の確保をメリットとして捉えている。

○教育長 私のほうから少し補足をさせていただく。まず、メリットについては、課長が言ったところになるが、例えば、小中一貫教育だと小学校の先生が、中学校にあがっても、その子のことをみることができる。中学校のほうも小学校の時からその子を見ることができる。小中一緒に先生方が子ども一人一人を見る面が多くなるところが一番大きいなメリットなのではないかと私は思っている。それが小中別だと見る目も半減するので、これが大きいところだなと思う。

デメリットの部分については、大槌学園のように義務教育学校で1年生から9年生まで一緒にやっているときに、例えば小学校から中学校にあがるときに、卒業式や入学式がなくなる。そういう意味で発達段階において「ここから中学生になったんだな」とか、儀式を通して成長を実感できるという部分は、義務教育学校の場合については、少し不足しているのではないかといわれるところである。

ただし、基本方針にもあるが、小中一貫教育は2つのパターンがある。1つは、大槌学園のように1年生から9年生までをトータルでやる場合、これは全く新しく義務教育学校という括りでやる場合。それから小中一貫校ということで、小学校と中学校の区切りを持ちながらも小中一緒にやるという形の2つがある。

紫波町では小学校、中学校と別々の括りを持ちながらも小中一緒にやるべきところはやっているという緩やかな小中一貫教育、それから大槌学園のように義務教育学校にして、それを強めていく、濃くしていく場合のやり方がある。当市でどういう形がいいのかは、今後の検討だと考えている。